ゼロの使い魔　風神伝

暇人☆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔　風神伝

【Ｎコード】

Ｎ１４７７Ｎ

【作者名】

暇人☆

【あらすじ】

地球で夢も希望もなく退屈な日々を送っていた男は神を助けて死んでしまう。神にチートな能力をもらいゼロ魔の世界に転生した彼は第二の人生を楽しむことができるのか。※受験後、読み返してみたらこれはないなと思うものがあったのでいくつか設定など改変しました。

プロローグ

「という訳で・・・」

「何がという訳でだっ！」

いきなりで何が何だかわからない皆さんへ簡単に今までのことを説明しよう。

俺死す。目の前に神。え？簡単にしすぎ？気にすんな。

「だからトラックに引かれそうになっていたワシを命を捨ててまで助けてくれたお礼に、なんでも願いをかなえてやると言っておるのじゃ。」

おぉ！めっちゃラッキー！たまには良いこともゆるもんだなぁ。

「死んだのにラッキーとは・・・変わったやつじゃな・・・」

心読むな。

「まあいい、とりあえずなんでも願いを叶えてくれるんだな？」

「あぁ、叶えてやる。」

それじゃぁ・・・

「ゼロ魔の世界に転生させてほしい。結界師の扇七郎以上の風を操る能力と火黒以上の身体能力、スピードに体から刀を出す能力。魔

法の才能をくれ」
「・・・超欲張りじゃな・・・」
うっせ
「まぁ、ええじゃろ。とりあえず行って来い」
こうして俺の第二の人生が始まった。

プロローグ（後書き）

受験後、読み直してみたらこれはないなと思ったので少々改変しました。

第一話

転生してから五年がたった。え？時間たつの早い？気にすんな。皆だってばぶばぶ言ってるところとか、飯っ食ってるとことか、寝てるとことか、もらった能力試してるとことか見ても詰まんないだろ？

さて、少し自己紹介やらその他のひとの紹介やらをしよう。

俺の前世の名前は鈴木健次郎。モテたくて様々な剣術を極めたが結局モテなかった。しかし師匠から「戦国時代に生まれる事が出来なくて残念だったな。」といわれるぐらいに強くなった。そして今の俺の名前はウィリアム・シルフィード・ド・ルナブロット。風の名門、ルナブロット公爵家の長男だ。見た目は青髪で将来イケメンになるであろう顔だ。神にもらった能力は練習中、才能がトップクラスでもやはり使いこなすには努力が必要みたいだ。

次は俺の父親、カルロ・ジーク・ド・ルナブロットの紹介。
身長１８７サント、年齢は３５歳、青髪で顔は烈風の騎士姫にでてくるサンドリオンを渋くした感じだ。風のスクウェアメイジで二つ名は「嵐」父の死を期に引退したらしいがもう少しで花壇騎士団の団長になるところだったらしい。ジョセフやシャルルとは従兄弟どうし。

母親の名前はリリア・ミスティア・ド・ルナブロット。身長１６７サント、年齢２７歳、少しウェーブのかかった長い青髪に美しい顔立ち、カトレア並みの慈愛オーラをまとっている。水のスクウェアメイジで二つ名は「大津波」経歴は謎。前父上に物騒な二つ名や経歴について聞いたところ部屋の隅でガタガタと震えだした。

さて、人物紹介はここまでにしよう。おや？いつの間にか外が真っ暗になっているな。寝るとしよう。え？早く物語始めろ？わかっている、安心しろ、明日は杖との契約の日だからな。

それじゃあおやすみなさぁい・・・Ｚｚｚ

第二話

ついに杖と契約できるぜ！ヒャッホオォォォォ！

妙なテンションになっちまってるがそれだけうれしいんだ。

今までルーンの呪文が書かれた本をたくさん読んで天才だ！とかなんだとかいろいろあったが・・・

ついに、ついに魔法がつかえるぜぇぇぇぇ！

「ウィリアム、そんなに楽しみか？」

おっと、顔に出てたか。

「はい！父上。早く父上や母上のような立派なメイジになりたいです。」

「あらあら♪」

「ハハハッ！そうか、頑張れよウィリアム。」

「はい！」

ＳＩＤＥカルロ

私の目の前でウィリアムがとてもうれしそうにしている。

こんなにはしゃいでいるウィリアムを見るのは初めてだ。

いつもは五歳の子供が読むには難しい魔法の本ばかりを読んで、遊んだりなどまったくしないウィリアムを見て心配していたのだが・・・

おそらくウィリアムは早く魔法が使いたくてそういった本ばかり読んでいたのだろう。

よしっ、この私が息子を立派なメイジにして見せるぞっ。

ＳＩＤＥウィリアム

「よしウィリアム、やってごらん。」

まさか父上自ら教えてくれるとはねぇ、ＳＳとかだと家庭教師とかだったけど。

「デル・ウィンデ」

不可視の風の刃　エア・カッターを放つ。

ゴガガガガガガガガ・・・

「・・・・・・」

「・・・・・・」

何が起こったか説明しよう。

風の刃が地面を切り裂きながら２５メイルぐらい進みました。

「すごいぞウィリアム！お前は天才だ！」

「うぐっ・・・く・くるし・・・」

強く抱きしめんなコノヤロー

まぁ、そんなこんなで父上指導のもと俺は魔法の修行をしていった。

修行をはじめ一年がたち俺はラインメイジとなった。

両親は天才だと言い宴を開いた。

「ウィル、明日はオルレアン公領へ行きますよ。」

つまりシャルロットにあえると

「久しぶりに従兄妹達に会うのは楽しみかしら？」

達？

「イザベラも来るのですか？」

「ええ、来るわよ」

おぉ、そりゃ楽しみだ。

第二話（後書き）

短いですが原作はいるまではこのくらいの長さだと思います。

第三話

「ウィルにいさまー」

シャルロットが抱きついてくる。

グハッ・・・なんだこの可愛い生物は・・・

「おひさしぶりです。ウィルにいさま。」

「久しぶり、シャルロット。」

原作開始時とは違いまだ明るいシャルロット。個人的にはクーデレなシャルロットの方が好きだがこれはこれで・・・

おい！誰だ今ロリコンといったやつは！二歳しかはなれてないからな！

「ウィルにいさまーあそぼー」

「シャルロット、遊ぶのはイザベラが来てからにしような？」

じゃないとイザベラ拗ねちまうからな。

「うん！わかった！」

「イザベラ、もう戻った方がいいよ。」

何が起こったか説明しよう。

イザベラが来て遊び始めたわけだが、シャルロットが遊び疲れて寝たとたんイザベラが護衛をおいて領内の森へ突入してしまったのだ。

「危ないから帰ろうよ。

「なによ、怖いの？」

怖いとか関係なく森の中には野生の幻獣とかいるから危険なんですけど・・・

「何がでてきてもウィルがやっつけてくれるでしょ？」

一応六歳なんすけどね、俺。まぁ能力あるから多分大丈夫だろうけど。

まさかこんな事になるとはな・・・

イザベラと遊んでいると狼のような幻獣フェンリルが襲いかかってきたのだ。

とっさに身を呈してイザベラをかばったはいいが背中に受けた傷は案外深いらしく、血がどんどん流れていく。

「ウィル！ウィルぅ！」

「イザ・・・ベラ…逃げろ・・・・」

「ウィルをおいてなんか行けない！」

「早く・・・行ってくれ・・・助けを呼んでほしいんだ・・・俺の為に・・・・」

そう言うとイザベラは渋々だが行ってくれた。

「ちくしょう・・・俺ここで死んじまうのかな・・・・」

背中からどんどん血が流れていくのがわかる。もしかしたらやばいかもしれない。

「マジ最悪・・・・」

三匹のフェンリルが距離を詰めてくる。

怪我さえなけりゃ楽勝だが・・・視界がかすんでるし立つのもやっとだ、マジ死ぬかも・・・

だがしかし！こんなことで死んでられっか！原作に入ってもいないのに！

「おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

風の刃をフェンリル目掛けて放つ。

まだ死ねない、まだ死にたくない。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

俺はとにかくがむしゃらに風の刃を放つ。

だがもうだめだ、体に力が入らない、もう立つこともできない。

「ぐっ・・・あぁ・・・」

結局俺はここでおしまいらしい。

ちくしょう、まだ死にたくない・・・

「・・・知らない天井だ・・・」

目が覚めた。どうやら俺は死ななかったらしい。

結構運いいんじゃね？え？運良かったら死にかけたりしない？気にすんな。

「ウィリアム！あぁよかった・・・心配したぞ！」

「ぐ・・・くるし・・・・・」

このクソ親父！殺す気か！ちょ・・マジ死ぬ・・・

「カルロ、そんなに強くしめたら死んでしまうよ。」

シャルルナイス！

「あのー・・・僕あの跡どうなったんですか？」

気になるぜ。

「あぁ・・・君は血まみれで倒れていたよ。回りにはフェンリルのバラバラ死体やらがあったけど。」

・・・暴れすぎかな？

「そういえばイザベラは？」

「隣の部屋にいるぞ。興奮して泣きじゃくっているからリリアがついている。」

・・・お前がついててやれよジョセフ・・・父親だろ？

「じゃあウィリアムしばらくは安静にしていなさい。いいね？」

「はい、父上。」

父上達が出て行ってしばらくするとイザベラが来た。

「ひぐっ・・・えっぐ・・・ウィルごめんなさい・・・私があの時

ちゃんと言うこと聞いていれば・・・ひっく・・・ウィルが怪我せずにすんだのに・・・」

「別にイザベラの所為じゃないよ。」

「でも・・・」

「イザベラはちゃんと助けを呼んでくれた。そのおかげで助かったし。」

「許して・・・くれるの・・・？」

「許すもなにも君の所為じゃない。だからそんな化悲しそうな顔をしないでくれ。」

「うん・・・」

それから俺は毎日自分を鍛え始めた。

別に襲われて怪我したからじゃないぞ。元々鍛えるつもりだった。

そんなこんなで俺は毎日修行三昧の日々を送った。

領内で亜人、幻獣、盗賊などがでれば親に内緒で殲滅した。

だが恐らく母上にはバレている。あの人何者なんだろう・・・

もちろん勉強や礼儀作法もしっかり学んでいる。
家庭教師に出される課題はちゃんとやってるし、魔法学院でやる内容も既に自分で予習してある。
礼儀作法も問題ない。
八歳の時俺はスクウェアメイジになった。
大人たちは俺を天才だと言った。
二つ名も決めた。「風神」、風神のウィリアム。
そして俺が十四歳の時、例の事件は起きた。

「シャルロットはわ「イル・ウォータル・スレイプ・クラウディ」・・・・・」
オルレアン公婦夫人を魔法で眠らせる。
オルレアン公シャルルが暗殺され、オルレアン公夫人も毒で心を失った。
この話を聞いた俺はすぐさまプチ・トロワのイザベラのもとへ向かった。
俺は大幅に原作を変えるようなことは基本しない。

だからオルレアン公のことは助けなかった。

シャルロットには本当に申し訳ない気持ちでいっぱいである。

「どうして・・・シャルロットがこんな目にあわなくてはいけないの・・・」

「イザベラ・・・」

イザベラは原作とは違い傲慢な性格ではない。シャルロットの事も憎んでいない。

俺が関わったからかな？

「どうして父上はこんなことを・・・あんなに仲がよかったのに・・・」

「・・・・」

ちなみにシャルロットはファンガスの森へ向かっている。

一応保険に北花壇騎士が一人あとをつけているらしいが。

「もう私こんな仕事したあくないわ・・・北花壇騎士団の団長なんて・・・」

「俺は・・・団長を続けた方がいいと思う。」

「どうして？」

「他の人が団長になったらシャルロットがどんな目にあうかわからないだろ？」

イザベラはハッとした顔になる。

「わかったわ、団長を続ける。」

「そうだ、ついでに俺も北花壇騎士にしてくれ。」

「ダメよ！危険だわ！」

「大丈夫。俺が結構強いのはイザベラだって知ってるだろ？問題ない。」

「でも・・・」

「シャルロットやお前を補佐もできるし、頼むよ。」

「はぁ・・・わかったわよ・・・」

よっしゃっ！実は騎士になってみたっかたんだよね。

「でも絶対無理しちゃダメよ？」

数日後のプチ・トロワにて

「はい、これシュヴァリエの任命状とマント。

なんか簡単に騎士になっちまったな・・・

「じゃあ北花壇騎士零号としての名前を考えて。」

零号ね・・・

「じゃあ・・・エンリルで」

エンリルってのは風と嵐の神なんだぞ。地球で。

そんなこんなでトリステイン魔法学院に出発の前。

え？時間たつの早い？気にすんな。

さて十六歳になった俺の容姿を説明しよう。

身長１７８サント、顔は少し中性的な美形だが身長と切れ長で猫をイメージさせる目といたずらっ子のような表情のおかげで女の子と間違われる事はない。

メイクをして表情を変えれば女の子の顔だが・・・

髪型は烈風の騎士姫にでてくるサンドリオンみたいな感じだ。

だ、誰だ！かっこつけてんじゃねぇって言ったやつ！別にいいじゃ

ねえか！

体型はいわゆる細マッチョだ。

そんな俺が今どこにいるかと言うとプチ・トロワのイザベラの部屋だ。

「イザベラ、行ってくるよ。」

「シャルロットをよろしくね。」

「あぁ、任せとけ。」

「じゃあね。」

「イザベラ・・・」

「何よ。」

「愛してる。」

「ハァ！？」

イザベラさん驚いてます。

「じゃな、行ってくる。」

「待って！」

「ん？」

「私も・・・愛してるわ」

イザベラと別れのあいさつをし馬車にのって魔法学院に向かう。

もうすぐ学院生活が始まる。

まったく・・・楽しみで仕方がないな。

第三話（後書き）

結構長めです。

第四話

さて、俺は魔法学院に入学した訳だが案外平和に過ごしている。

とりあえず俺は「やぁ、俺はウィリアム。ウィリアム・ド・ルナブロット。ウィリアムって呼んでくれ。」的な感じで男子生徒に話しかけた。

最初はスクウェアだとかシュヴァリエだとかであれだったが話しているうちにほとんどの男子生徒と仲良くなった。

中にはかなり仲の悪い奴もいる主にヴィリエ・ド・ロレーヌとか。

ちなみにギーシュとは前世ではいなかった親友と呼べるぐらい仲良くなった。

まぁ、それはさておき俺の前には股間を濡らしたロレーヌがいる。

え？理由？シャルロットとロレーヌの決闘の介添え人を引き受けたからさ。

「まぁロレーヌ、そう落ち込むな。」

余りにも可愛そうなのでちょっと慰めてやる。

「いや違う！何かの間違いだ！この僕が負ける訳がない。」

あぁうぜぇ・・・

「潔く負けを認めろロレーヌ。」

「僕があんないやしい生まれの私生児に負けるわけが「おい、ロレーヌ。」」

「な、なんだね」

うざいなお前、とりあえず死ねよとゆう言葉は心の中に留めておく。

「これ以上俺の友人を侮辱したらただじゃおかないよ。」

「フンッ、何度でも言ってやる、あんな私生児にこの僕が・・・フギャッ！」

とりあえず顔面を軽く殴る。

「言っただろ？ただじゃおかないって。」

「・・・・・」

気絶してやがる。

俺はロレーヌの頭のてっぺんを河童の皿みたいな感じで永久脱毛してその場を去った。

そんなこんなでキュルケとシャルロットの決闘騒ぎも起きた。

俺が介添え人としてその場にいた事と、ロレーヌの眉毛が永久脱毛された事以外は原作どうりに進んだ。

このイベントで俺はキュルケと友達になった。

そして夏休み。

え？時間たつの早い？気にすんな。

俺は原作開始まで暇だから傭兵団的なものを作りルナブロット領内で盗賊とかを退治することにした。

だが俺が仲間にしたいと思う奴は一人しか見つけられなかった為、傭兵団は諦めて二人で盗賊退治やら模擬戦やらをやることにした。

見つけた奴の名前はマリー。

理由は知らないが没落貴族らしい。

１８歳。身長１６５サント。結構グラマーな女の子だ。背中あたりまでのびている銀色の髪にはウェーブがかかっている。

水のスクウェアらしい。

そしてこれが重要なのだが先住魔法で身体を強化しているらしい。

なんでも人間の身体にある限界を水の先住魔法でなくしリミッターを解除している状態らしい。

他にもなんか仕込んでいるらしいが詳しいことは知らない。

ちなみに魔法は知り合いのエルフに仕込んでもっらったらしい。
知り合いにエルフがいるとか・・・

さて、今日はマリーと初めての模擬戦だ。
「最初に言っとくけどあなたが私より弱かったら組まないからね。」
いきなり解散の危機！
「俺の方が強いよ・・・多分。」
本気だしたら瞬殺なんだけどなぁ・・・
「それじゃいくわよっ！」
マリーはでっかいメイスと杖を手に突っ込んでくる。
今までにも色んな猛者と戦ってきたがその中でもマリーは最強だろう。
彼女のパワーとスピードはほんとに凄まじい。
下手したらガンダールヴより強いんじゃね？
「おっと危ね」

俺は刀でマリーの一撃を受け止める。
ちなみにこの刀は俺が手から出したものに硬化と固定化を強力にかけたものだ。
だからマリーのメイスを受け止められたんだよー良い子の皆は真似しちゃだめだよー

まぁそんなこんなで夏休みも終わったりなんだりしてもうすぐ二年生だ。
時間がたつのが早いが気にしないでくれ。
それはさておき今俺がなにをしているかというと、北花壇騎士の任務だ。
任務の内容はガリア国内三か所でミノタウロスがでたから狩ってこいと言うものだ。
超ふざけた任務じゃね？コレ、せめて一体でいいから元素の兄弟あたりにやらせてほしい。
まったくジョセフめ・・・
並のメイジじゃ傷一つつけられない相手を三体とかほんとふざけてるぜ。

そんで俺は三体目のミノタウロスのもとえ向かっている。

え？二体どうやって倒した？簡単さ。

一体目は風の刃、二体目は手から出した刀で首を切り落とした。

流石チート能力。

そんで今は三体目に挑むところなんだが、魔法で倒そうと思う。

能力ばっかじゃつまんないからちょっとオリジナル魔法を試そうと思う。

どんな魔法かって言うと、金属を錬金し電磁加速を加え放つ。

早い話レールガンです。

おっ！ミノタウロス発見！

早速レールガン行きまーす。

結論から言おう。

ミノタウロスは粉々になりました。

あんなの防ぐなんて、イマ〇ンブレ〇カーってすごいね。

とりあえず報告をすませ、学院に帰ることにした。

もうすぐ原作開始だよ！楽しみぜ！

第四話（後書き）

新キャラ登場。これからもちょくちょく出すつもりです。

第五話

ついに原作突入！春の使い魔召喚だぜぇぇぇぇぇぇぇ！！

ここまでテンションが上がったのは杖との契約の日以来だぜ！

「なぁギーシュ、どんな使い魔が来ると思う？」

「さぁ？君は多分風竜かとかマンティコアあたりじゃないか？」

風竜とマンティコアは実家で飼ってるからなぁ・・・

「まぁ、この際なんでもいいか」

「ハァ・・・気楽だね君は」

なんだそのため息は！

「ぼくはなにが来るか今から心配で仕方がないよ」

「とりあえず変な虫とかが来ない事を祈るんだな。俺の番っぽいから行ってくるわ」

「あぁ、がんばれ」

「我が名はウィリアム・シルフィード・シュヴァリエ・ド・ルナブ

ロット。五つを司るペンタゴン。我が運命に従いし、使い魔を召喚せよ」

目の前に光る鏡のようなものが現れる。

そして・・・

なんか可愛らしい黒猫さんが出てきました。

「みゃぁぁん・・・」

・・・・

訂正しよう。

猫じゃないなコイツ。

なんか精霊の力まとってる。

恐らく何者かが先住魔法の変化によって黒猫になってるっぽい。

もしかして韻竜？

「ミスタ・ルナブロット、コントラクトサーヴァントを」

「あ、はい」

とりあえず契約しよう。

「我が名はウィリアム・シルフィード・シュヴァリエ・ド・ルナブ

ロット。五つを司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ」

黒猫を持ち上げキスをする。

「ふむ、成功ですな」

よし、人気のない所へ移動だ

「で、お前何者？」

単刀直入に聞いちゃうぜ！

「なんじゃ、気づいておったか・・・妾の正体を一目で見破るとは・・・只者ではないな・・・」

・・・かわいらしい女の子の声でこの口調・・・くっ・・・凄まじい破壊力だ・・・

「何をもだえておるんじゃ？」

「いや、な、なんでもない。で、お前何者？」

「うむ、妾は・・・」

コイツの話が無駄に長かったのでまとめると、

狼のような幻獣。

大昔からハルケギニアに存在する古代種で昔の人たちには神狼とか韻狼とか呼ばれて恐れられていたらしい。

でも現在はかなり数が減ってほとんど絶滅状態らしい。

「でもそんな種族聞いたことないなぁ」

「まぁ今は変化を使って隠れながら生活しているからな。大昔はどうだったかは知らん。」

「ふーん、じゃあ種族の事はもういいからお前のこと教えて」

「うむ、どんと来い」

じゃあまずは・・・

「お名前は？」

「ない」

は？

「なぜ？」

「妾は物心ついた時にはすでに親はおらんかったのじゃ、だから名前は覚えていない」

「そうか・・・」

「別にお主が気にすることではないぞ」

「うん・・・でも名前ないとあれだから俺が勝手につけていい？」

「名前をつけてくれるのか！？」

目がキラキラしてる・・・そんなにうれしかったのか・・・

「じゃあ・・・ノワールってのはどう？」

どっかで聞いたことがあるかもしれないが気にすんな。

「うむ、気に入った」

気に入ったんだ。

「お主の名前は何というのじゃ？」

「俺はウィリアム。ウィルでいいよ」

あ、なんかいつの間にかサイトが召喚されたっぽいな。

「ぐあ！ぐぁあああ！」

「ねぇ、コントラクト・サーヴァントってそんなに痛いの？」

「妾はそこまで痛くなかったぞ。それより使い魔召喚では人間も召喚されるのか？」

だよなぁ人間はやっぱ珍しいよなぁ。
「ふつうは召喚されないんじゃない？」
「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ」
コルベールがそう言うと皆飛んでいく。
「さて、俺たちも行くぞ。ほら乗れ」
「うむ」
ノワールを肩に乗せ空へと舞い上がる。
あ、ルイズとサイトが怒鳴りあっている。
とりあえず放置だ。

まぁ、そんなこんなで夜だ。
「さて、行くぞ。肩に乗れ」
「どこに行くのじゃ？」
「そこらへん」
「・・・・・」

だってホントにそこらへんだもん。

「しっかりつかまってろよ」

つーわけで飛ぶぜ。

「お主・・・速いな」

「そんなに褒めるな、照れる」

俺達は今学院からちょっと離れたところにいる。

「で、ここに何の用があるのじゃ？」

「元の姿に戻ってよ」

流石に学院でもとにもどるとあれだからなぁ

「うむ、わかった」

ノワールは口語の呪文を唱える。

そして・・・

「・・・・」

何と言えばいいのだろう・・・

すごくでっかくて黒い毛の狼なのだが・・・

なんか・・・ニャ〇コ先生とキャラがかぶってる気がする・・・

猫から変身だし？

しかも斑が黒くなった様な外見なんだ・・・

いくらなんでもキャラ被りすぎじゃね？

「どうじゃ？」

「でかいね」

「えっへん」

別に褒めた訳じゃないんだが・・・

「そういえばノワールって何歳なの？もっと大きくなるの？」

「妾はだいたい４００歳くらいじゃ。人間でいうと１５，６歳くらいじゃ。ちなみにもっと大きくなると思うぞ、多分」

「まだまだ子供か」

「な、なんじゃと！」

「妾は子供ではない！立派なな大人じゃ！」

ちょ、痛い痛い！噛みつくなマジ死ぬから！

「んぐぐぐぐぐぐ・・・」

んぐぐじゃねーよ！洒落になんねーからマジ！

ちょ、やめ・・・おい！

ＳＩＤＥノワール

目の前に光る鏡の様なものが現れたのでくぐってやった。

それが使い魔召喚のものだとゆう事にはもちろん気づいておったぞ。

毎日退屈だったから潜ってやった。

鏡の先にいたのは青い髪の少年じゃった。

妾を呼び出すほどだからすごいメイジだと思ったが期待外れかと最初は思ったのじゃが・・・

ウィルは只者ではない。

桁外れな魔力もそうじゃが何より驚いたのは奴が操る風だ。

あれは精霊の力を行使するのとも人間の使う魔法とも違う。

そんなものとは比べ物にならないくらい完璧に風を操っておる。
そんなウィルが主なら退屈はせんだろう。
明日からが楽しみじゃ！

ＳＩＤＥウィリアム
部屋に戻ってきた。
とりあえず寝るわけだが・・・
「ノワール、お前どこで寝る？」
どうするかマジ寝床作るか。
「別にどこでもかまわないぞ」
「そうか、じゃあ今日は好きなところで寝てくれ」
よし寝よう。
明りを消して寝ます。
「そこで寝るの？お前」

なんかノワールがベットの中に入ってきて丸くなってる。

「どこでもいいと言ったのはお前だぞ！」

「別にいいけど変化はとくなよ」

「ふっ、妾は変化に関してはエルフにも負けぬ自信があるから大丈夫じゃ。ウィルこそ魅力的で美しいからと言って妾を襲ったりするでないぞ」

しねーよ！普通しないから！猫を襲ったりしないから！

「まぁ・・・いいや・・・とりあえずおやすみ」

「うむ」

そんなこんなで長い一日が終わった。

第五話（後書き）

夏休みが終わってしまったので更新速度がかなり落ちるかもしれません。

第六話（前書き）

更新遅れました。

第六話

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

いきなり何叫んでんだこの野郎と思うだろうがこれはしょうがないと思うぜ。

何が起こったかってゆーと朝起きたらなんか女の子と一緒に寝てたわけだ。

あぁん？羨ましい？確かに羨ましいと思う。

俺だってそう思うに違いない。

だが実際こんな事になってみると非常に心臓に悪い。

マジで死ぬかと思ったぜ・・・

「あ、あんた誰だ・・・」

「やっと起きたかウィル、待ちくたびれたぞ」

・・・・・・・・・・・・・・ノワールか。

「ん？どうしたのじゃ？」

と、とりあえずコイツの容姿を説明しようじゃないか・・・

えーと身長は１５０サントくらいで黒髪で可愛い顔。

ゴスロリが似合いそうな容姿だな。
ちなみにスタイルは結構いいなって・・・
「なっ、なぜ全裸！？！？」
お、落ち着け俺・・・こういう時は素数を数えるんだ！
「ん？どうじゃウィル、妾の体は。ほれ、欲望に身を任せ襲ってくるがいい、一回くらいなら相手をしてやるぞ、ほれほれ」
「・・・・・・」
「どうしたのじゃ？何か言わんか」
「・・・・・・」
「ちょっ・・・待て！・・・早まるな・・・その手に持った杖を置け！詠唱をやめろ！・・・ちょ・・・ま」

「つまり急に俺をからかいたくなってやったと」
「うぅ・・・そうじゃ・・・別にいいではないかそんなに怒らんでも女の裸体を見れたのだから・・・」
「何か言ったか？」

「いえ何も」

あーマジ疲れた・・・ハァ・・・

「おいノワール」

「なんじゃ？」

「今から超大事なことするから邪魔するなよ」

「うむ」

さて、まずロックをかけてっと、

そんでもって手から刀を出す。

「にょわっ！？な、なんじゃそれは！！」

「気にするな」

「う、うむ、妾は気にしないぞ！」

気にしないんだ。

それはともかく俺が何をするかってーと杖との契約だ。

この刀と契約後体内に戻し、肉体を杖にしようって訳だ。

そうすれば杖を持たずに魔法を使える

どーだすげーだろ？
さっさと契約してこれから起こるイベントに備えなければ。

「契約完了！！！」
やっと終わった・・・数時間で契約とか俺マジすごくね？
ところでさ、なんか外が騒がしいな。
「おい、ノワール。乗れ」
これは行くっきゃないっしょ。

「忘れてたあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」
今日ってサイトがギーシュと決闘する日じゃん！！
完全に忘れてた・・・
ちょ、まさか終わってたりしてねーよな？
「下げたくない頭は下げられねぇ」

間にあったぁぁぁぁ！

よかった・・・ガンダールヴ発動に間にあった・・・

あ、ルーン光ってる。すげー

お、ワルキューレ一体撃破！

なかなか速えーな。

俺ほどじゃないけど。

「わ、ワルキューレ」

六体のワルキューレが出てきた。

意味ないけど。

原作でも瞬殺だったしね。

「続けるか？」

あ、ぼーっとしてるうちに終わってた。

まぁ、いいか

ガンダールヴのスピードを見れたし。

「ま、参った」

ギーシュテメェそんなんじゃモテねえぞ！！
そんなことはさておきサイトを治すか。
「レビテーション」
「ルイズ運べ」
「わ、わかった」
「治療はしてやるが秘薬は自分で買えよ」
「治療ってアンタ水の魔法使えたの？」
あっはっは！聞いて驚け！
俺は火以外はすべてスクウェアなのだ！
すごくね？マジすごくね？
「まぁ、一応」
さてルイズの部屋に着いた。
「まずは秘薬代払え」
「秘薬持ってんの？」
「うん」

よしいっちょ治すか。

まずは怪我を治してっと。

ここで重要なのが完璧に治さないことだ。

原作でもなおってなかったしな。

念のため三日間目がさめぬよう魔法をかける。

「一応終わったけどしばらくは目が覚めないからよろしくね」

「わかったわ」

「んじゃ、俺帰るから」

「うん」

さて、帰るか。

いやーなんか原作開始したって感覚が今になってきたよ。

よしこれからのイベントに備え修行するか。

第七話

「ウィリアムぅ！助けてくれぇ！」

「ムリダナ（・×・）」

今俺は例の・・・あれだ、うん。どっちの剣を使うか～みたいな感じのイベントに巻き込まれてる。

散歩なんてするんじゃなかった・・・

サイトが必死に助けを求めているが俺は助ける気などまったくない。

え？いつの間にサイトと知り合いになったって？

サイト「あ、あのっ、治療してくれてありがとうございまっす！」

俺「フッ、気にするな・・・」

的な感じで知り合いましたが何か？

「さて、俺は帰る」

「見捨てないでくれぇええ！」

サイトが何か言っている無視する事にしよう。

「こんな朝っぱらから何の用ですか？」

オスマンめ・・・俺の睡眠を邪魔しおって・・・

「実はの、ミス・ヴァリエール達が破壊の杖捜索に向かったのじゃが・・・」

ん？

「あの、もう一度・・・」

「破壊の杖の捜「うがあぁぁぁぁぁ！！！」どうしたのじゃ？」

忘れてたぁぁぁぁ！！！やべぇ完璧忘れてた！

「まぁ、よい。君には彼女たちの後を追って守ってほしいのじゃが」

「もちろん行きます今すぐ行きます！」

クソッ！フーケイベントを忘れるとか俺はバカか！

「で、では頼んだぞっ」

俺は今、烈風の騎士姫でカリン達がもっていたような軍杖を持ち方にノワールを乗せ空中を移動している。

「ノワール・・・どうしてそんなに機嫌が悪いんだ？」

「フンッ」

何かしたか？俺。

「お主！なぜ一人で散歩に行くのじゃ！妾は暇で暇で死ぬかと思ったぞ！ガブッ！！！」

「いっでえぇぇぇぇぇぇぇ！！！！耳！！！！耳ちぎれる！！！！ぎゃぁぁぁぁぁ！！！！」

とりあえず散歩に行く時は一緒に連れていくと言う事で許してもらえた。耳が痛い・・・

まぁそんなこんなで到着です。とりあえずマチルダ探すか・・・おっ発見！

「やぁやぁミス・ロングビル・・・いや・・・マチルダ・オブ・サウスゴータ」

「土弾（ブレッド）！！」

「ウィンディ・アイシクル」

いきなり攻撃とかひどいよね・・・とりあえず俺は相手の魔法をウィンディ・アイシクルで相殺し、能力で杖を吹き飛ばしてやった。

「さて、大人しくしてもらおうか」

「くっ・・・」

俺は杖をつきつけて言う。

美人の女性に杖をつきつけるなんてやりたくないんだけどねぇ・・・

「お前魔法学院の生徒だろう・・・なんで私の事を知っているんだい？」

「さぁ？そんな事よりティファニアさん元気？」

「ッ！？！？！？」

ティファニアの名前出した瞬間めっちゃ驚かれた。そりゃそうだ。

「まぁ、詳しい事は後でね。あっちも終わったみたいだし。あんたも色々気になるだろうけど魔法学院に帰ってから話すよ。だからそれまで大人しくしといてね」

爆発音が聞こえたから終わっただろ・・・多分

「後俺を殺そうとか思ってるかもしれないけど無理だよ」

「チッ・・・わかったよ」

まぁそんなこんなでサイト達の方へ向かうと・・・

「あれ？なんでお前いんの？」

この言葉を体育祭の打ち上げとかで言われたら相当傷つくだろうな・・・

「オスマンに行けって言われたから来た。そしたらミス・ロングビルとフーケっぽいのが戦ってたから助けに入った。ちなみに逃げられたよ」

「なんで盗賊なんかに逃げられてるのよ！あんたそれでも貴族？」

おーおー言ってくれるじゃねえかルイズ。自分勝手な行動で皆を危険な目にあわせたのになぁ。あの時ちゃんと逃げてりゃサイトも危険にさらされなかったのにね。

「深追いは危険」

シャルロット！ナイスフォローだ！

「そーゆー事。それにここまでフライで飛んできたから精神力もヤバかったし。まぁ杖は取り返したんでしょ？目的は達成したんだからいいだろ」

「そうです。それにミスタ・ルナブロットがいなければ今頃私は死んでいました。ミスタ・ルナブロットを責めないで上げてください」

マチルダもナイスだ。

だいたい俺はフーケ捕まえる為に来たわけじゃないしね。責められる筋合いはない。

ルイズは渋々といった感じだが納得した。まったく面倒なヤツだ・・・

そんなこんなで俺達は魔法学院へ帰った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1477n/

ゼロの使い魔　風神伝

2011年4月7日13時57分発行